

特42

800

本天一坊全





柳東照神君家康公より
八代目の將軍有徳院殿吉
宗公と申奉る即神君の

宣公の御長男紀
伊大納言
従三位
光貞
卿の

名草郡和歌山の城主
と光貞卿御長
男ハ細教
と申す

三男より
て紀伊國

方





頃ハ宝永三年三月
月すへの事よぞ

男ノ頼職公少将マて内蔵頭
殿と号す御三男ハ吉
宗公後又天下の武
将となる此君幼名徳太
郎とて兼中波の方
の御腹マて月
満て御誕生なり爰又一つの難儀なる
ハ光貞公ハ四十二戈の二つ子とて至
て人の嫌ふ事なきハ家老将監マ御頼
け有て御元服之上主税頭吉宗公と号
す將監江戸總所ノ邸マ引移り給ふ然
又將監の妻の侍女沢野ハ吉宗公の御
意マかなひいつら懐妊マ依て栗田口
近江守カ打マ御脇差御朱印を賜り
て紀州和歌山の城下平沢村の母三の
素マて安産マける又程なく若君沢野
共又空マく相果マり母の歎き大方
トず村の者又慰マし漸マ吊心ける



有リける吉宗公ハ本
家御入り天下武將なり賜小
茲マ山伏感應院と云へる
修驗者有リ其朋友又
官島嘉傳次と云
へる浪人有
リ六戈の小
兒を残り相
果マり残り
小兒を徒弟
とて室沢
と名を
改め或
日お三
の室
マ室沢参り
ト處お三
ハ孫を思



空沢又娘や孫亦吾身の不幸をものかたり歎ける
 亦御朱印等を見せけき空沢忽悪意を生じ或日師
 生の供て衆屋市左工門へ参り毒
 薬を盗み歸り師生お三の二人を
 毒殺し腸差御朱印を盗み村々の
 者を欺き餓別受け亦演去さ
 一の襦袢一つ菅笠一巾い種
 々の品をもしい寺を逃去
 加田浦まで犬を殺し
 菅笠外所持の品
 へ血をぬりす
 て置吾が死
 せし
 体
 まりて

立去りける肥後の熊本へ
 参り荒物屋利兵衛へ
 小借二なり
 名を五郎
 八とよび
 廿二戈造
 送り主人
 の金を百
 両を盗み
 茲を逃
 去り途
 中、人赤
 川大膳
 合ひ出



元と
 赤川大
 膳ハ水戸
 家浪人藤
 井紋大夫及心の
 者なるが黄門光国郷の
 手打となり其子赤川
 大膳ハ門前むさいて其の
 長堀の衆楽院の修験者の弟
 子となり爰は生長し旅の女を
 殺し金子百五十両を取り空沢と
 徒黨して師生を欺き手下五十五人を
 抱へ其内器量有る者を渡辺治大夫本
 多権大夫と号し赤川大膳ハ一番家老とな
 り享保十一年三月大坂へ押出し紅屋庄藏と
 宿となり白の葵の幕を張り表札は徳川天一坊
 旅館と筆太は書きとり町くの騒一方なす奉行所までハ

こハ捨置が
 とりと西の
 奉行所より取
 調べ亦土岐丹
 後守此訴をき
 志ハ一大事
 なりとて脚へ
 呼出し吟味し
 及しが天一
 坊ハ丹後守
 ま向心余
 未だ知
 ずや某
 當所
 軍紀
 州ま
 おもす

時家老加納將監の妻の侍女沢野と申へ御胤を宿し
 沢野ハ平沢七少母三の素へ下り生まるとるハ即
 ち某なり産後母ハ相果とり依て美のちが
 しまの衆衆院にて生長いと只令
 天一坊と名のるなりと手箱
 の内より取出せし御朱
 印賜さしなり丹後守ハ拜
 見いとさき是より恐尊ミさま
 ぐもてち天一坊ハカヘりける城代ハ
 玄關まで送り出るよぞ諸役人いんさんよ致
 ける其より下みくと呼むりく旅館に帰りける
 城代土岐丹後守より右の赴き
 江戸老中方へ早打にて相達
 さきけり此時赤川大膳と
 申合せ用金と申立て町
 くの者より八萬
 八千両の
 金を集



天一坊ハ
 大膳と共に
 笑つ不入り此
 上ハ京都入り
 勢を見せんと紅
 屋より京都所司代
 見物
 申と

下みくと行列にて紅やを立出て程
 く京都へ乗込ミ三条通り銭屋四郎左工
 もんを旅館と定め亦々大坂の如く暮を
 たり表札をりげとり此さびも大ささき
 とありせよやより訴へ出るとる故町奉行の

役人二人を出し、天一坊を引立て来せと下ノカへ
 其如く申せ、天一坊ハ役人を見て奉行所ハ
 囚人の出入をなす所、又て此天一坊
 の行くべき所、非ず、又て要用有、ハ
 町奉行此方へ来、対面許すべしと
 取合、是ハ是非、町奉行より
 所士代、又申ける、牧野丹波守物
 事、使を出し、御苦勞な、ハ
 所士代邸まで御出、

さるべし
 丹波守御
 仕度
 上の口
 天一坊ハ心得役
 人を帰して其より
 衆物を美々しく出て立ち

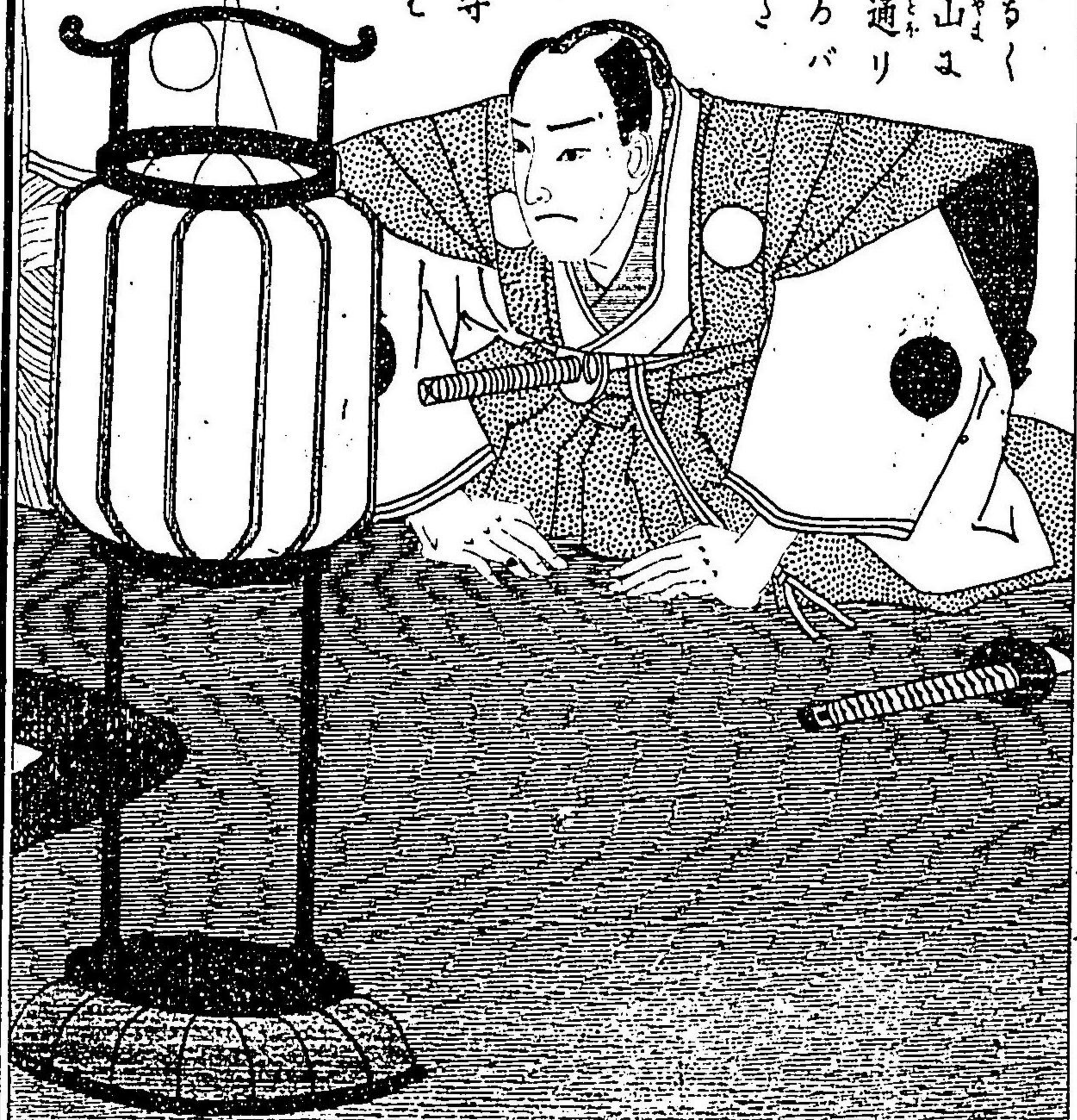


程なく所司代邸へ入り
 丹波守、対面有
 リ大坂と同じく
 いろくき、がきを江
 戸御老中へ早うちよ
 て如何も、少心申さ
 んと伺、近江守
 右の赴き、將軍へ言上、
 及け、御覚へ
 有りと、上意なき、ハ早そ
 く早打、て此より申達、
 廉、累、さき、よう、も、あ、少、置、べし、と、又
 京都、も、も、用、金、と、申、立、六、萬、五、千、兩、を、集、り、さ、て、大、坂、京、都
 を、カ、び、よ、く、欺、り、此、上、ハ、江、戸、へ、出、ん、去、り、あ、少、江、戸、老、中、町、奉、行、其、他
 諸、役、人、の、大、小、數、萬、り、と、め、と、る、所、も、京、都、大、坂、の、如、く、ハ、行、き、が、と
 去、り、と、出、ず、バ、大、望、な、り、が、と、其、用、意、同、せ、い、を、さ、び、や、り、又、出、と
 ち、下、み、と、大、音、又、て、大、道、せ、ま、し、と、ひ、ろ、が、り、か、く、東、海、道、く、と、る、又、誰



天一坊

有て恐るくものなノ程ちく
 江戸へつきとり芝ハツ山よ
 大なる家をりて例の通り
 幕をとり表札を立てノカバ
 江戸中大評むんとなりと
 るを御老中の御聞又達
 ノ老中月番忝平伊豆守
 どの町奉行大岡越前守
 を以て相糺すべりと仰
 せとさきせけれバ越前守
 ノ只今もくと天一坊
 殿御同道下さるべりと
 申付候と言けきバ其
 方共立帰リて越前
 守又申聞すべり
 町奉行の門ハ



科人囚人の
 出入す
 なる所
 な
 リ此
 天一坊のサく
 べも身分ちトす用事有少
 ハ此方へ参するべり
 と言すて奥へ入り
 よける是非なく立
 方へ
 リて
 此由
 申上



けせハ大岡殿ノむしく工夫いとさせ亦
 々二人を出し天一坊より申けるよ
 越前守申つけよとへ所
 奉行のもんハ科人引
 廻り出る共
 天下の決断
 所なり此方
 へ呼よせさんミ
 致すよ何のものがあると
 有べき急ぎ来よせよも
 遅退よ及ば、役人を以てめり
 取り来よと申付候と申けきハ天一
 坊是よハへきりきりして何さま最なり然よ
 明日来るべりと二人を帰し其より例の
 如くきふひやりよ出よち下みくと奉行の
 門まで来り大岡どの出向ひて恭しく奥
 の間へ直し置其方が徳川天一坊と名のるものり



何故當方へとけけもなく町や御紋をつき幕
 をもり表札を立りやととすよぞ天一坊あへる
 よう其方共来りよずやよく聞くべし我母よ
 御胤を宿し紀州和哥山よて安産せり
 すなもち我を生て母ハ死
 りり懐よんのせつ後の証
 志として右の二もを下
 さきより例の如くよ申よ
 ぞ大岡ハりりふバ二品よい
 けん仕よんと二よなをあよとめ
 り、るよりなる証よび候上ハ
 上聞よとつり宜しく御とりもち仕よん
 先刻のぶせいハ役目もれバ御免し下さ
 るべりまづ今日ハ御帰館有之御きうそく
 然べりと申けるよ天一ハ心中よ大岡もふく
 せし上ハ今ハ恐るよものなりと大よよろあび帰りけ
 る亦く用金と申立集り金よて廿三萬八千両よなりける





天一ハ大膳と相どんり
 て沙汰のあるをまち
 ける大岡ハ腹心郎
 等平井平次郎を呼
 び其方今より町人す
 ぶとるり和州和哥山
 の城下平次村へ参りか
 やうくのものごとく
 と相さすべし
 と申付ふと
 リ平次郎
 畏り
 百五
 十里
 の道
 を夜を日よ
 ついで



紀州和歌山平次村へ参り老母三亦山伏感應院
 非期の死をとげたる事山伏又宝沢と云ふ弟子
 の有り事又師生の死後村くのものよりせんべ
 つを受け諸国修行又出ると又宝沢加どの浦
 よて持物七品へ血をぬりすて有り事
 又濱奉行へ参り彼七品を乞ひ受け又
 宝沢の朋友久助をつき幸傳寺へ行き
 沢野の死去又ミづ子の死去等事落も
 無く探り急ぎ帰りて言上げ彼七品と
 久助を差出しけせば大岡殿大又
 喜び其より大岡ハ六十
 人を手配して天一の
 素へ使者出せりわバ
 天一ハ大望成就時未
 りと大又喜び其より用意
 して家来引つき大岡の郎
 へ赴き又大岡出向ひ奥へ
 とかりをき程なく久助と

彼七品を持来リ天一見より
 顔色土の如く茲に於て積年
 の悪計見顯さき悉く縛り付
 拷問して悉く白状及依て
 天一ハ引廻上獄門大膳治大
 夫權大夫ハ打首殘の者ハ江戸
 十里四方御構よて悪人ろび
 善人榮へ大岡の明智賞す
 べし目出度し



明治十七年二月十七日印刷
 全年全月二三日 發行
 印刷兼發行人
 日本橋區本町三丁目一番地
 沢久治郎

